

エマソンとホイットマン——〈詩人〉の立ち位置と〈自己〉の様態

堀内 正規

シンポジウムで発表したことの要旨を、引用を省いて、かいつまんで記してみよう。

本発表の目的は、ホイットマンへのエマソンの「影響」という問題に、ホイットマンがまだジャーナリズムの世界にいた 1842 年に、ニューヨークで聴いたエマソンの講演、及び 1844 年刊行のエッセイ「詩人」から、ホイットマンにつながりそうな論点を提示すること、及びホイットマンの“Song of Myself”の「自己 (self)」の在り方に着目して、エマソンのエッセイ“Self-Reliance”を参照枠にしながら両者の自己の在り方を比較すること、以上二つの観点からアプローチすることだった。

ホイットマンは 1842 年 3 月にニューヨークでエマソンの講演「詩人 (The Poet)」を聴いていた。*The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson: volume III* に収録されているその講演では、アメリカ合衆国にも理想の詩人が出てくだろうと述べた箇所があり、アメリカ生まれの新しい預言者的な詩人が存在するというエマソンの言葉が、若きホイットマンの記憶に残っていたことは想像できる。しかし講演全体におけるエマソンの目的は少し違うところにあった。エマソンはそこで、人間はそもそも自分の感じ考えたことを外に向かって express する存在であり、誰でもが行動の次元で詩人であり得ることを聴衆に説いて、人びとを encourage したかったのだ。もう一つ、この講演のエマソンならではの主張は、外界のあらゆる事物は何かもっと universal なものを示す symbol であり、自分の周囲の世界は、言葉で名づけられることによって、その普遍的な次元のものごとへと、想像力によって変換されるという考え方だった。1844 年刊行の *Essays: Second Series* 所収のエッセイ「詩人 (“The Poet”)」は講演「詩人」とは一部分しかテキストを共有していないが、論点においては共通性が見られ、ホイットマンはむしろこちらのエッセイからより大きい影響を受けた可能性がある。アメリカ合衆国独自の詩人の到来を語った箇所のエコーは『草の葉』初版の序文にも詩のテキストの随所にもはっきり読み取れる。第二の点、あらゆる読者を表現の可能性を帯びた者 (= 詩人) として勇気づける点は、しかしホイットマンには引き継がれなかったようだ。テキストから推していくと、ホイットマンにとって、狭義の意味での詩人と普通の人びととの間には質的に大きな懸隔があったと考えねばならない。本発表で私はこれを、エマソンの〈無私〉とホイットマンの〈エゴ〉と名づけてみた。

二人の違いとして、講演同様エッセイ「詩人」でもエマソンは想像力による「メタモルフォシス」を強調しているのだが、思考の流動性、生命の流れにシンクロするようにスピーチが flow するというエマソンの視点は、ホイットマンにはさほど見られない。それを mystic な特質と名指すならば、ホイットマンはエマソンのその部分、或いはメタフィジカルな様相とはそりが合わなかったように思える。そのため、“Song of Myself”では、ホイットマンは彼自身が別人に変性する（成る）のではなく、たとえばアラモ砦の史実なども含めて、人びとの苦しみや喜びの場に、ヴァーチャルな第三者として「立ち会う」詩人のように振舞っている。

ホイットマンにおける自己 (self) の様相について言えば、それがエマソン同様に狭い意味でのエゴ、自我ではなかったことを強調する必要がある。“Song of Myself”で言えば、後にセクション 4 になる部分のホイットマンの“Me”、或いは他者たちのうごめきと離れて立っている“what I am”とは何かという問題になる。エマソンの自己 (“self”) との類縁性が感じられるのは、後に第 50 セクションになった箇所である。そこでは詩人の自己は“what I am”ととりあえず名指すほかはないような何かであり、説明など不可能かつ不要な、とりあえず“myself”と言ってみるしかないような自己である。おそらくそこにエマソンの影響の問題が垣間見える。

エマソンのエッセイ「自己信頼 (Self-Reliance)」は概観すれば 3 つの部分から成る。あらゆるグループや組織の歯車にならず、conform せず、自己自身であれ、と説く部分 (1)、次に誰とも共通な universal な自己を説き、世界の実相を Being (存在) ではなく Becoming (生成) であるとし、自己はとことん passive に、計らいを捨てて、目の前に咲く一輪のバラの花のように在れ、という箇所 (2)、3 つ目にそれまで指摘したセルフの二つの面を踏まえた上で、社会の現状を具体的に指摘し、付和雷同するモブとしての群衆にならず、宗教、旅行、知性などの面で、自分らを取り巻いている社会という wave に流されずに生きよと読者を励ます部分 (3)。エマソンのセルフをどう捉えるかは、第一パート、第二パートという対照的な 2 つの自己についての教えのどちらに強調を置くかによって変わってくる。第二パートの部分の、自我を武装解除し徹底的に普遍的なものを信じる箇所がエマソンならではの思想であり、同時に二つのセルフのいずれをも重視してそのつなぎ目を把握することも、エマソンの思想としては必須の手続きになる。

問題になるのは、エマソンにおける徹底的な「無私」に対して、ホイットマンには彼なりの自意識があったのではないかという点だ。ホイットマンの大文字の“Me”の在り方は、自意識に左右されず落ち着いている

点でエマソンに通じ合っているが、同時に実は自分というものが物語の主人公のように対象化されていると見ることもできて、その意味ではエマソンのようなものではない、とも言える。それもまた自意識の働き方だとすれば、ホイットマンがエマソンと袂を分かるところが確かにあった。ホイットマンにはジャーナリスト的な視点があり、たとえばアラモ砦や戦艦の交戦に代表されるように、アメリカ社会の各所、各階層のファクチュアルな存在に随所で言及していて、それに立ち会う形の詩人の自己は、あくまでも **Walt Whitman** という名前を持った、特権的な預言者詩人だった。つまり、ホイットマンがエマソンのようなセルフからある種の影響を受けたとしても、やはりホイットマンは、**becoming**（生成）の世界にリアルを感じることも、固定した身分や階層やジェンダー、浮浪者や娼婦やインディアンや大統領を、或いはもっと言えば人びとのオピニオンによって形成された世界を、強く前提にし続けていたと言うことだろう。

ホイットマンのような人が、エマソンであれ誰であれ、そもそも他人を真似たり、ストレートな影響を受けたりするはずがない。私が重要だと考えるのは、そもそも「エマソンの影響」とは、部分部分において彼の言葉や思想がリレーされることではないのではないか、ということだ。エマソンが“**Be yourself.**”と言い、誰にもその人だけの“**character**”があると言うのは、自分の真似をしてくれるなということに等しかった。誰の言うことも、自分の言うことも含めて聞くな、あなたはあなたの可能性を誰に気兼ねすることなく最大限に出せ、というのが、そもそものエマソンの主張だったからだ。ホイットマンがエマソンとは異なる彼なりの自己を、すなわちホイットマンならではのキャラクターを打ち出すこと、それこそがエマソンの望みに適っている。ここにエマソンの思想の最も偉大なところがある。ホイットマンは間違いなくエマソンの影響を受けた。しかしそれはホイットマンがよりホイットマンらしくなることに役立ったのだ。それが反動的にならず、ルサンチマンから解き放たれる状態である限りにおいて、それこそが「エマソンの影響」であったと結論してかまわない。